

221  
3/4

竹  
花  
乃  
海



特22

455





三十三年の冬、身に病うけて郷國米山の麓に歸れる折、かりそめに詠めりし歌の今年春にかけて二千首に近ける中を、擇びもて梓に上さん丕、なせり、これを詩集と云はんもなか／＼におほけなく、況して世に問ふわざの嗚呼なる、唯々背に冷汗の傳ふらん思ぞすなり。調のみだれにも其然る處と背き給ひて諒せられんことをこそ。

寅年の春

溟華の假寓にて

姦

雅



目次

戀	.....	挿書五葉
汐烟り	.....	一
みだれ琴	.....	一三
黄朽葉	.....	二九
胡かは	.....	三六
畫貌	.....	三八



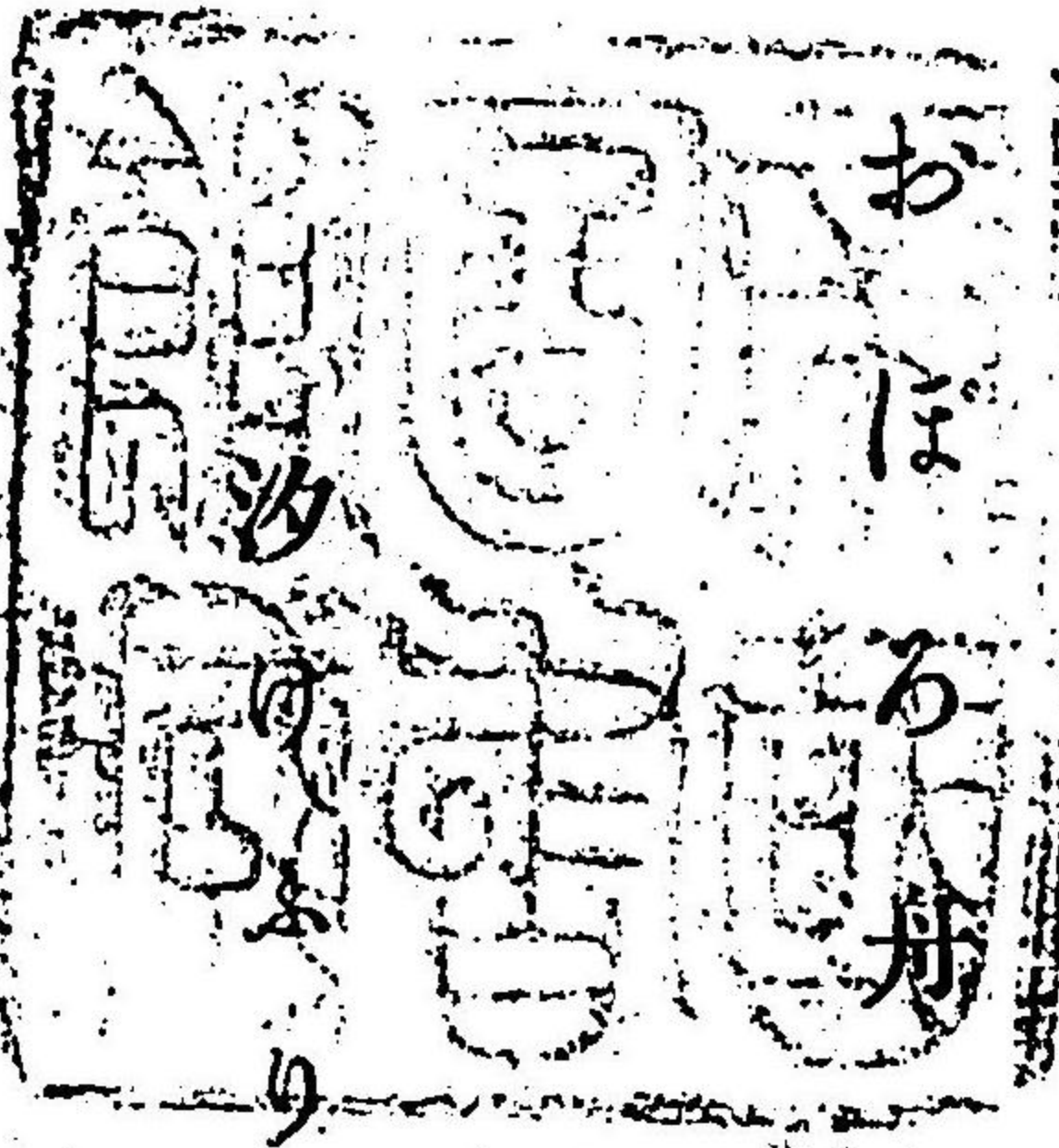
夕時雨	浦千鳥	われは露	破芭蕉	暮鐘	闇こゝろ	あさ草	下り舟
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一〇〇	九七	九〇	六九	六五	五九	四四	四〇





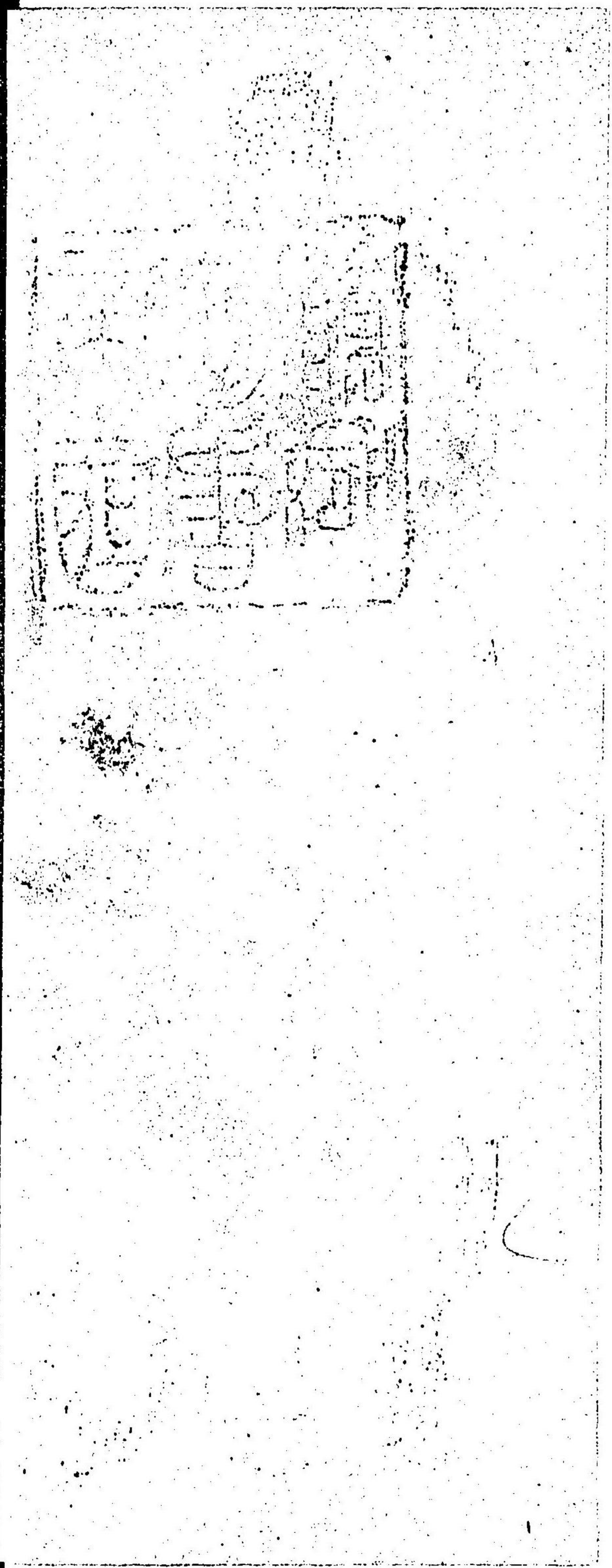


繪となさは月出方の遠浪に君はたゞや  
ふ小船ならすや。



長谷川濤涯作

。 - 。





みち沙にかならず逢はん誓ひなりし須  
磨の夕は雨にふけ行く。

神あらんありて守らん四十五里浪をは  
るかに金とる旅路。

持つ宿世すくせさこそと知らば海はるか珠と  
る舟に子やはやらじを。

かにかくに幸と定めて船出せん入江し  
づかにうしは満ち來ぬ。

誰が幸を祈らんものか辨天の朱あかの扉の  
風にはためく。

鐘なりぬ又の撞手はためたひよ今ぞわ  
かれの我は野に立つ。



茲にして何を運命の占と見ん、眺めはて  
なき舟べりに立つ。

空しきか、ねぎこといかに空しきか今朝  
御手洗の水にかゝなふ。

立つに瀬の我影水に消ぬにけり大海の  
底によき國やあらん。

○ 〇 ●

ゑにしあらば何時ぞの又とたゆまれつ  
ささくどまでは現なりしか。

舟に陸にかたみの袖や小雨ふるかゝる  
夕を別れんものか。

○ 〇 ○

山椿咲くらん頃と誓ひてし人いまいか  
に春を行く雁。

霧はれし相模の灘の朝はがら孫が門途  
を舟に送りぬ。

雲去りて照る日は沖にかぎろひの何か  
ばかりを胸いたまゝる。

似しとのみ唯に別れし最合舟くれ行く  
岸にひとりそむ。

返り見のこれを名残か目に遠き夕日が  
丘の樅のひと本。

はの闇き宵のとぼそに正しくも見しは  
現の花あかさ家。

送り來し里のはづれのかたみ橋欄に霜  
解の日影けふとき。



旅行かば夕の雲なあふさそと母がいま  
はのみ言葉かして。

問へどたゞ夕空とほく指してかの丘こ  
ゑてかの山越ゑて。

一しきり沙のひゞきに寢覺して五大堂  
下の夜の雨見る。

見返るにはやも野の道なかば來ぬ桃咲  
く里や母います里や。

譬ふれば風に吹かるゝちぎれ雲やかて  
は空に消なん運命か。

われも見じ君にも見せじくれの空あす  
は誰なる雲のいざよひ。

はてしなき惑はしとやとくいねん寝て  
の夢を占どかは見ん。

楳とめんとすれば岸の葉柳のちりのま  
にく舟は流る。

ふと覺めしねやの小窓の薄月夜誰そや  
の影のさすとはの見し。

去りなんかさ云へ名残りのゑにしなる  
垣の朝貌よき色に咲け。

消ぬがての夢のなごりはあけぼのよか  
のうき雲にまされやゆきし。

雨細し誰と擇ひてよびとめん今背みな  
がら人なづしき。



うら若き樂師が夢の少時をその笛とり  
て野を遠くゆかん。

思出よかゝる夕を思出よ雨にくれゆく  
川づらの宿。

別れあり夢ありかくてうつくしきわれ  
百年の末はいのらじ。

### みだれ琴

朝貌の露の干ぬまの筑紫琴絃のみだれ  
を雨ふりいでぬ。

朝寒の鉦のそゝるによびとめてをさな  
き僧にもものまゐらする。

夕風のとたねさみしき頃の主萱原分け  
て何方まざれし。

並木原松にあらしの吹きやみて月いで  
頃を露にぬれ行く。

うたゝ寝の君さめたまへ遠丘の花に夕  
日の影うすれたり。(ある藝術家のもとに)

誰が夢のこもれかその音もがすか若  
草かくれ水流れゆく。

朝あけを人尋ねゆく霜の道わたちのあ  
どの唯だ長きのみ。

青馬よとく足かきはやめよ峠路は雪に  
なるげの木の葉のみだれ。



君が行く旅は山路六十里今日を佛滅幸  
あらせ玉へ。

打しめりそれや送りの鉦なるか野の末  
遠く人はうすれぬ。

釣橋をわたるとしてはイみぬあとなる  
人の歩みつたなき。

透垣のかげの氣はひやそれなりし雨ふ  
る宵の笹の葉さやぎ。

夕ごを湖のはとりの森に見る君もか  
それの宿世もつ身か。

鳥部山はふりしをへて歸るさのはなれ  
野の道すゝき手まねく。

吟めどめん、として田でぬる柴垣の宵の  
小雨に袂かざしぬ。

再びは踏まじの誓もろかりき緋桃花ち  
る故郷の道。

山深み鳥の啼音にふとし見る眞晝の空  
めひかき小暗き。

行ずりを袖ふき返す木がらしに野寺の  
鐘のかのづから鳴る。

繪たぐみのゑの具とくまのしばらくを  
さし寄る妹の何に頬笑む。

夏草の深きにこもる夢やあらん野もせ  
吹き行く風しづかなれ。



ひぢぬるもゑにしなればや草深野分く  
る袂の露は拂はざりき。

一たびは鉄の手とめてはこらしく櫓たもとの  
木蔭の幸をときしか。

日影いたみうつし、鉢の朗貌のよき色  
なるが先づ脆かりし。

河をはるか南ひる野に雲盡きて迷ふ羊  
に秋の雨降る。

更にあすは明日に定めん秋の宿君も旅  
の子酒強は玉へ。

何しかも故とはあらで越し方の月の六  
日は我にうかりし。

花、青葉、こゝに幾月あり詫びて今日荒磯  
の雁にたゞすむ。

恁乍らつひなる旅かながれ葉の風の一  
夜のかうそめなりし。

夕雲のいざやふさまか現しみの夢に入  
りなん境のしばし。

またも見ん願はどまれ鉢の木の挑の二  
葉に歌貽し玉へ。

吹かれ來て途に崩るゝ蟬壳の二つの一  
つ水に流しやりぬ。

病みわびてぞぞろに見ゆる夕窓の蜘蛛  
のあや糸風にあやうき。





うれ立ちて行く野くづるゝ雲の降とき  
めき才を君に云ひしか。

またの日の茲にありやの旅の辻さらば  
か袖にゆめ幸おはせ。

秋はものゝかれゆくとかの慣はしを妹  
が椽唄とこうら若き。



追風<sup>おびて</sup>うけて亂る袂<sup>たもと</sup>を抑<sup>おさ</sup>めべきわれとし  
もなく秋の野に立つ。

ひと列<sup>つら</sup>は西に彌彦の山越<sup>こ</sup>ぬ今を舟人  
雁<sup>かり</sup>聞くらんか。

母は守南の窓に倚りまさんうらぶれ姿  
けふ途長き。



絶へぬるかゑにしの橋はたへぬるか夢  
よじづかには此川わたれ。

秋はたゞ淋しとのみに興おほせ月の江  
戸川小舟のよたり。

慙くてもしも流れはてばの思なる舟の四  
人を月何と見し。

月入らんまでをど然るか舟の夜の歸さ  
の梶は君にまかせん。(以上三首江戸川に舟をうけて)

呼びかはし暮るゝ堤に立ちてのみ戀の  
中川船はあらざりき。

うら若き隣りふすまの京の人木枕いか  
に木曾の夜ふけぬ。

杖とめて指さんの山もくれゆきぬ鐘な  
る方をそこと定めん。

八束穂の稻はたわいの暖みち五作が歩  
み妻よりおそき。

霧こめて水先わかぬ大利根のとねの川  
瀬を開にうかふ。

現ゆめの宿直の君にまゐらせし衣の紫  
ねびにすぎたり。

黄 朽 葉

夕たつ岸の小草も  
うらがれの疾からぬ流れ



すゑ白う森をめぐりて  
野を飲り海に入るとや。

われやはた茲に幾とせ  
徒爾とらにしげき惱みの  
うらぶれの姿うつしよ  
とも今はいまに名残りか

さ思ふに胸やすからず  
見やる方水のまにく  
浮きしづみ心としなく  
流れ寄るさくらの朽葉。  
かたれ汝が水のこし方  
われそよる華かなりし  
その折の榮はなを思ふに

行末のよすがにまよふ  
野は霞かざるひわたる  
里は香に人うつゝなき  
かくてももの粧はひすがた  
おほらかに何をか説きなん  
わたる鐘音におどるけば

夢かそれ酔のすさびか  
人は去り花はちりく  
唯見る地夕やみしるき

あはたゞし春のいつはり  
深みどりそれも少時  
茲にしてなにをかの彩  
やがて来んならはし嵐



枝を去り風に捲かれて  
まよひ入る終つひの谷川  
瀬にせかれ岩に漂ひ  
なかれ来てこゝに見し哉。  
逢見しもゑにしなればぞ  
とばかりを朽葉よかたれ

我もはた流れにつれて  
今ぞゆく遠とほの山川。  
さらばなり水上停まざれ  
黄朽葉よたゆたはすゆけ  
全じかるさだめ持つ身の  
さすらひの行衛は問はじな

朝顔

狭き郷人さかしげに  
物うさのこゝに幾月  
宵々のゆめも幸なき  
この宿や疾とく去らん。

去り乍ら残るるにしか  
二葉なる苗のころよ  
あした夕そをぞすさみに  
育くみし垣のあさかは  
やがてもの色や何なる  
培ひしぬしはあらずも  
朝々の人のなぐさめ



かならずをよき色に咲け

晝貌

物皆はこゝに色なき  
日盛りの眞夏の空を  
唯ひとり里に野路に  
咲きよはふあやの誇らし。

雄々しきや露も求めず  
踏まるとはならはしどかの  
汝はそもさせる運命か  
いたましの晝貌の花。

下り船

市を追はれて唯ひとり  
歸らんとての船なりし  
かへり見すれば雲幾重  
かしこ望のぞきの影やすむ  
思ふあしたの日を仰ぎ  
俯してゆふべの鐘を聞く  
淋しからずや再びは

踐まじのちかひ脆かりき。  
昔ながらの水清み  
かくて慙くしもうらぶれの  
空しき想のせてゆく  
ながれは然さままで疾はやからず。  
ふとしも堂の築地壁



いろくかきの爪つめの痕  
それにも残る四つの袖  
椎つゑの木かけにわかれしが。  
やつれ姿の悲しきは  
旅を歸るの道にして  
夢の追おぼ懐なはるかなる  
人に遭ふてぞいやまされ。

あらぬかその面影の  
側目わきめ乍はらもおもふせに  
似しとのみなる最合舟  
さして岸邊につきにけり  
上る堤の草つゝさ  
追分途のはるなしや

やゝに離るゝ夕日笠  
ひとりイみとはく見送る。

秋 草

秋寒をそこにのかれし蛇くぢの穴掩へかく  
せ千草八千草。

訪來つる月の草舎はどさゝれて蔓吹く  
風の瓢寒ひまげや。

霜夜ふけぬ刻む佛師が刀の冴へみ像な  
かばを神やこもらせし。

霧こめてながめ空しき曉あけの戸に沖の燈  
臺消すやを惑ふ。



さばきあまり風に流るゝ黒髪を沙の穂  
近くかさしても見つ。

おのづから練るにおのゝく日記のはし  
の歌の一つに心ときめく。

森を出でゝ遠にかけ行く夕鳥秋の今宵  
を誰にまたるゝ。

虫に寝し間瀬の一夜の忘れか遊旅を有  
情の誰か手に觸れん。

見ざりしやそこなるわらべ手を負ひて  
此野の雨にのかれ來し牝鹿。

ひそかにも旅を幸なき音と聞きぬ君か  
その主笛の夕呀へ。





こぼれては苔にしみ行く森の露間に  
かくるゝみ靈さませや。

美しき花やとのみに送り来て千草の野  
路に君はたゆたふ。

月今宵心おほねの笛の音に病む身乍ら  
を立ちて覗ふ。



とのみにて肯きたまへ故郷はむかし乍  
らに粟ど實れる。

耳よせて聞かんやがての胸の幸櫛目よ  
しばむ朝窓の人。

こもり居の早稻田の里の秋三月ワわれに  
柴笛ふしならざりき。

唯にその浪にまかせん性格どかの君を  
合舟夕川溯る。

我とこそうちも笑まるゝ歌の才よべの  
枕の一時なりけん。

掘りも得し黄金の釜のありやいかに與  
作は今日も山に歟とる。

秋風は草の戸にこそ見すやわれ裕すが  
たの今朝年若き。

かゝる夜か相行く京の片はづれ口疾あ  
まりを人に指されし。

一刷毛の墨繪のそれと見ても止まば追  
懐さよさ遠の夕山。



ゆるし玉へ人ならはしの賢言かのづか  
らなる才に病む秋。

試みに召させん秋の花やなに相來し人  
は野に背向立つ。

旅なれば恚くも身にしむ聲かそれ鹿に  
木の間の月あらはなり。

そこ行くは京に忍びの若人が月の鳴子を  
曳きくも見玉へ。

行きくれてひとり月踏む河原道ましろ  
の石よよき名負はせん。

やがてその夢に入りなん山の茶や木の  
實わかちて遠く往なしぬ。

よき夢のまさしく見ゆむ宵心地月の小  
窓をさしも煩ふ。

おもしろの節やそれなるよべの葎草間  
の蛙日に來て遊べ。

湖近くよしやありげの高塔の夕日の水  
に影長う曳く。

胡笳の聲北に細りて雲をよふ泪羅の秋  
の水は澄みたり。

花市のきはひわれから離れ來て都はづ  
れの水の音聞く。

琴ふりぬ月も何なる今宵もや君に煎茶  
の濃きをまわらせん。



瀧の音のどこ身に添ふかうつたへに那  
智を下りの眺めけふとき。

かのづからこぼるゝ秋の一葉だに心と  
きめく昨日やうつゝ。

こゝろみに曳きつる綱のわれ乍ら手振  
興ある月の玉川。

思ひ子のこれもれる遠の島こゝて浪間  
しづかに東風わたり来る。

かくしつゝいつを限りの桑の弓引きて  
も立たむ小田の案山子か。

勇ましき子の産聲や櫓の音や千石舟は  
港出て行く。

思ひ寝のせめての母に逢はざりき米山  
こゝろてまぎれにし夢。

透し見るかなたの山もあらばなり猿さるよ  
今宵戸に来て睡れ。

一村むらはうつゝともなき聲のあや日挽く  
頃を小雨とは降る。

甕かめき夢に君もや醒めし相摸灘浪の穂と  
はく月入り残る。

闇こゝろ

我こゝろやみにさまよひ  
わが心やみにイむ



求めねば見るに物皆  
黑白なきぞ思やすかる。

掩へかくせ雲の一ひら  
虚空はいま日のさかり  
野路行くに笠もあらなく  
仰ぎ見ん瞳たふべき。

雲みだる曠野の秋の  
水近くまよふ小鳩か  
さらすかの谷の峽間の  
日にうとさ紫蘭の露か。  
和風に溶けて流れて  
麓ゆく春のふは雪  
みづぐし然しもか弱の

そのひとみ世に堪へよとや。

知らざりし里の行ずり  
丘に見る雄々し向日葵  
流るゝに水も瘦せゆく  
この日光仰ぐはこらし。  
あゝ然るか褪せすめけざる

その色の夢よ長かれ

やがてなる日の盲ひ神  
停め得んよすがもやある  
一たびは彩色の望みに  
小手かざし市に狂ひさ  
きのふわれかへり見すれば



雲の峰西にくづるよ。  
落つる日に眼とざして  
丘越えてはるか峰なす  
かしの山奥の開路を  
行きゆかば終の我郷。  
慰めは駒鳥の啼くねか

なぐさめは水のしらべか  
然らずわれぐらき洞窟の  
昔にふし露をこそ友。

暮鐘

鐘のひびきを聞くなべに

思は遠く流るなり  
今わが魂はおくられて  
君すむ窓にイめり。

流るゝ雲のすがたにも  
おどろく宿世たれ強ねて  
夕風あるゝ欄に倚り  
ひとりし影を感ひしぞ。

ゑにしは葦の一枝草  
くづ折れやすきものとしも  
野終に摘み得て歸るさを  
ひとり頬笑むとなかれ。

春は鶯はなに鳴け  
君よ榮ある諸に立て



心の秋のさびしみを  
世振りの人に聞く勿れ。

鐘のひびきに送られて  
思はやみをさまよひり  
何時に歸らんわが命  
はてなき空をのぞむ哉。

やれ芭蕉

茲もまた住み愛の宿か新らしの日記を  
づ窓の芭蕉の破れ。

やう／＼に撞木の綱手とりてのみ夕雨  
堂に稚はたゆたふ。

行手たゞかくの我世か宵闇の稻妻しは  
し野路を消ぬされ。

やよ童添竹さりて疾くもて來垣の雛菊  
霜にいためり。

月矢神こゝに力や盡きませし篝火いま  
は霜に消ぬゆ。

さては我茲にの何時と覺束な落葉のや  
みに孤り拱く。

去年は西にことし東の市の戸に望の夜  
おなじ雨の空見る。

立どまり少時檜の笠とき玉へこの里紅  
の木の實こぼる。





見やる方雲は別れぬ一ひらの憂き色な  
るが森に落ちゆく。  
忙しげのそと行く人よ召させずや霜夜  
ふけたり戀の辻占。  
蘆寒き水面に雁は鳴き落ちて僧を迎ひ  
の今を日くるよ。

〇 〇



鶯は黄にめぐらす垣はとさよれぬ秋に  
歌知る人な入り來そ。

山獵夫も知らじなこゝの峽間路旅の歌  
屑棄ても往なばや。

涯とはき野はみながらに色盡きて宮守  
鳩の森はたれ行く。



天あまが下何れは問はずこの子ひとり秋風  
盡つくきし國くににいなさば。

よべ夢によしのありげや朝寒の裏戸を  
いでいで僧そうは竹伐たけうる。

召よす親おやに歸かへる山家の水近く竹割る音に  
ふとたゆまれつ。

別わかれ來きて道のすさびに里人の葦刈る舟  
にのりても見しか。

許ゆるされて籠かごりはしつれ伐う木きのひよき身  
に秘ひそむ山の朝窓。

強つよかれとせめてはいのれ行く秋の夕窓  
近く立つ身なりけり。

利根の水寒きあしたのおぼしまに幸こ  
とづてん舟を待つ哉。

残し來し郷の一人に見せばやの手振り  
物めく月夜の踊。

もどかれん人も欲しげの後ろ影紅のた  
すきのはし解けかゝる。

はれ小袖それも去る日の夢かたりと思  
ひとやは現し御言か。

それにだに占ひ心はづかしき夜明鳥を  
人何と聞く。

かほけなき世振りの幸は祈らじを鶯は  
るは窓に来て鳴け。



母は唯だ我に頬笑みおはさんか市に馴  
れつとまでを文せし。

里の子は何時に歸りし残されて新發意  
ひとり山に蒼狩る。

春の夜のちまた歸りを呼とめて桃にゆ  
かりの酒を強はばや。

岩に立ちて谷の千仞を透すとどくる月  
さ絶へぬ長し心か。

樋の流に流れ漂ふ黄葉くち葉汝がみち  
遠し疾くも行かずや。

醒めつるも夢の名残りの物うきを日和  
雀の窓に群れくる。

里川の汀たゞやふ薄烟り月さすはどに  
水ながれ行く。

別れこし友の一人を籠こごれるをゆふべは  
歸れ峯の白雲。

それをしも秋の興とかたまへつる籠の  
小鳥の啼くに拙ちよき。

茂さかり合ひて等ひとしたふるゝ萩に見てねた  
み説かんもおろかしの才。

ぞとは知れあや雲さてもあれかしを湖  
のはどりの暮に祈いのりし。

疑うたがはですがりもやせる片羽蝶させる小  
草も風にゆらるゝ。



秘められて何を千年の命とや歌巻とく  
も市に古りゆけ。

矢かず盡き剣くだけでなほしかく孤<sup>さび</sup>砦  
に守れのみ旨か。

出でよ見る十六夜空の小さ曇りまろふ  
と君に何の歌ある。

紅、緑折りなんそのいろくに花野の  
くれを歩み返しつ。

見返らじとすれば更に心憂の越し方山  
や雲たよかよれ。

遙々し、途の眺めもうつよな<sup>な</sup>の想ひの門  
は行くに鎖されぬ。

さしも今濡れをいとはん袖ならじ降り  
ふらずみの空かたはぶれ。

そことしもわかぬ遠音に寂おはせ砧の  
ぬきは慙くも荒れたり。(見ぬ人への返し)

我どわが心怖れにゆるされてねやの灯  
火かきは立てつれ。

上つ瀬のながれやいかに小春日を小阿  
賀の川の下り筏士。

追懐は秋にこそあれ友情は花の下なる  
少時なりとか。

そは物のかけならましを寄添へて相來  
し人は行手はよかる。



秋はいまなかばならんの夕磯に佇む友  
のうしろ肩うつ。

燈せしねやを物うみ出でゝ見る森も木  
枯れの月あらはなり。

憂き窓を遠にまぎれし雛鶴や天のたよ  
りかわれに探り來。

なにせんの望としなき磯こもり白帆夕  
は目路に入らざれ。

すさび琴人をまつ問のなまなかに澄む  
ね詫しき宵の秋かな。

何れなる残りこゝろはさあれ唯だ風の  
行方を追ひて歸らん。

透しみの窓はるく  
の月こよひ野の宮  
あたり狐嫁入る。

野に終つひのゑにしかさはれ  
緋たすきの畑  
打ち姿人惜しまるよ。

たまさかの都の君に筆強つよめて  
稻穂はて  
なき景色指さす。

物どしのさあらぬさまによき占うらなのよ  
にありやを問へもかねたる。

身に泌みて聞くに寒げの  
遠浪や磯の一  
夜の海物かたり。

われは露  
(秀才の人にまゐらす)



かしこくも天なる父の  
み恵みのわれは寵兒  
遠の方歩みもいつか  
生れ来て茲に國あり  
何と云ふところか問はん  
醒めやらぬ夢に見ぬつか  
大曠野はても知られず

草つよき雲横たふる

静かにも水やめぐる  
睜けばあたりも  
うつくしの、さては永久  
住むべきの茲をわが世か

萩、桔梗、そは花の名か

女郎花 それも秋草  
よき音する 汝なれやこほろぎ  
其處なるは松虫君か  
知らざりし東野の末  
みどりなす草に起りて  
紫や、黄や、くれなるや  
かけわたす虹のとは橋。

然さるか今、虹の遠はし  
さるか今、花の眞まさかり  
然さるかいま、虫の樂たのしみの音  
嫉しわれ、おくに惑ひぬ。

宿り詫びかへすひとみに  
西の方雲はおどろき



我どこそ形をほこりの  
天地やなにのいつはり。

彼の丘の諸葉ならして  
濤そらにうつと聞きしが  
か弱さのまづ脆かるは  
露わが身いまを堪へじな

覺束な、すがるとはすれ  
さ揺らぎの常歌ひ見ぬす  
恁くてしもやみの草原  
求めぬん幸やこもれる。

去るあした人、野に立ちて  
潔かるをわれに褒へし  
またの夜をこゝに寄り来て





脆かるを説きて往にし加

爾は鬼まれ、天なる父の

御教へよかゝらざりしを

地に碎け、さして消ぬ行く

宿世もつ身とは知らじに

その折の榮にたゝよひ



我ひとみさやかにしを  
おふぎ見る彼方は故里か  
雲幾重よるの風あるよ。

浦千鳥

やる瀬なき恁ぐの思や  
なにもしも流し果つべき

唯だひとり渚にたちて  
雲とはき濤にひそるく。

落つる日の名残りのそれか  
沖のかた稍やに薄れて  
あめつちは闇に入るげを  
微かにも白きよこたふ。

あゝ我世さても盡きんの  
いぶかりに拱くなべを  
惟浪の真砂うねりて  
影近く玉藻より來る

夕時雨



後れゆく一羽のそれは孤し雁夕山しぐ  
れ今を小露れよ。

うき夢のさまよひそこに流れゆけ兎月  
よふ葦の湖。

君こもる小諸あたりの今いかにあられ  
降る夜を枕返しつ。(信濃なる藤村子の思はれて)

さてもあれ暫しは花に春の夜の君がゑ  
まひの撮影とらん。

この浦や寒さいたらぬ隈も見ゆ葦の  
葉交ひの水し涸れぬる。

誰にかも負はせんものか冬かれて干潟  
つゞきの小舟のゑにし。

終にそのはては消ゆげの遠ねして詫す  
む門を水流れ行く。

綱代守君に問はんか更けて聞く水上寺  
の鐘のこもり音。

なまじいの情の袖はかざゝされ露に肯  
づく小草なりけり。

永からんゑにしは知らじ新住あたらの菊の二  
葉に朝の水うつ。

人ふたりほしいまゝたる夕月夜小笹篠  
はらゆくに露ちる。

黄葉青葉山のあき風吹き冴へにのこる  
ときはの傷いたまるゝ哉。



行かたはまぎれな我もあと追はん風に  
まよなる冬の水泡。

さばかりを何にまよふか和田津海の底  
のくらさに潮ながるよ。

隠れ家のこゝにも秋の色寂びぬ摺の山  
茶花せめて強かれ。

霜を寒みやどり煩ふむら雀より来よこ  
よに夕餌やらむ。

ふたり住む夜ごとの夢かたどふれば湖  
をこめたる朝のとは霧。

いさよふく芽萱が上の穂風にも母や召  
すかの感はしの旅。

新らしき家居のその日思ふにも亂れけ  
ふとき霜のひな菊。

逢瀬あらば遠ゆく雁のあと追はん母は  
かしこのかしこのみ空。

唯だ友のふたりが末よ圓まきかなれ出づる  
に門の霜冴へまさる。

千鳥あすは誰たれが寢覺のねにや鳴く波な  
る磯に妻は残り。

實銀杏の見わたこはるゝ門長う寺の夜  
馴れぬ友と別れぬ。

吹かれ散る木の葉は紅あかに黄に見わた武  
藏曠野の秋の空たかき。



行方のよき日ありやはかにかくの思出  
清く都はなれん。  
(かりに東都を去らん折に)

南天の朝庭赤うこぼれたり枝の雀よき  
ても啄つばめ。

あらぬ日の一人残りの影思へ、絶らん袖  
のそれもかたみか。

さればその終焉いまはのさまか雲かゝる落方  
月のおぼろくや。  
(二首友の終焉に)

まどかなる戀かこもるの思はれに苔の  
菊を途に碎きつ。

實葡萄の紺こ紫しゆかりの色よかれまゐら  
す僧の今日か見ゆなん。

互みなる思は開の空こぼて月の宮居に  
相見るらんか。

やうくに薫たちそめし蔓草ののびる  
がまよを畑にゆるせや。

それや唯だ假事ならんを淋し笑み凍て  
たる途に袂分ちし。

こと更に強ねんの望み何かある十歩の  
畑に君は歎とる。

いとせめて幸かし玉へ守り神照る日あ  
やなき旅路なりけり。

呼はし誰れ答へんものか山彦の星降る  
途に歩みどよめつ。



瑠璃るりなして沖はれ今をよりて來る大浪  
小波須磨すまはよき浦。

紀の國をはるく出でゝ浪華路の一夜  
ゑにしを稚子とわびぬる。

(以上八首旅にして詠める)

持つ惑さ乍らありて末秋の日の入方に  
思ひとけよや。  
(さる人の許に)

ふしを弱み、雪になわるゝ若竹の峽間せま小  
道みちをわけても行けとか。

おぼる舟 (完)





明治三十五年五月廿日印刷  
 明治三十五年五月廿五日發行

正假金廿五錢

不許複製

著者

長谷川善作

發行者

大淵涉

印刷者

礪波伊三郎

印刷所

礪波印刷所

大阪市南區心齋橋北詰

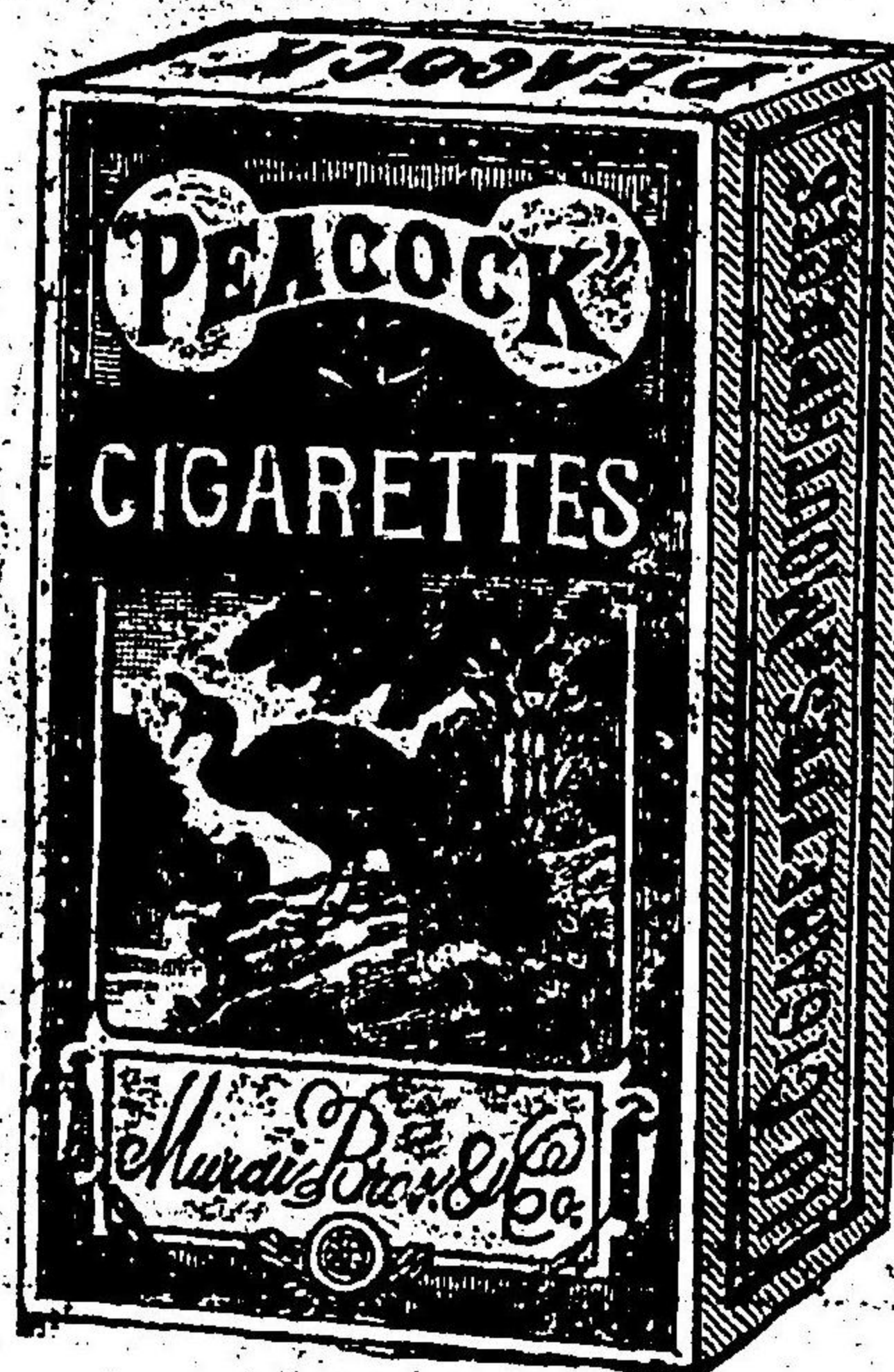
發行所

々

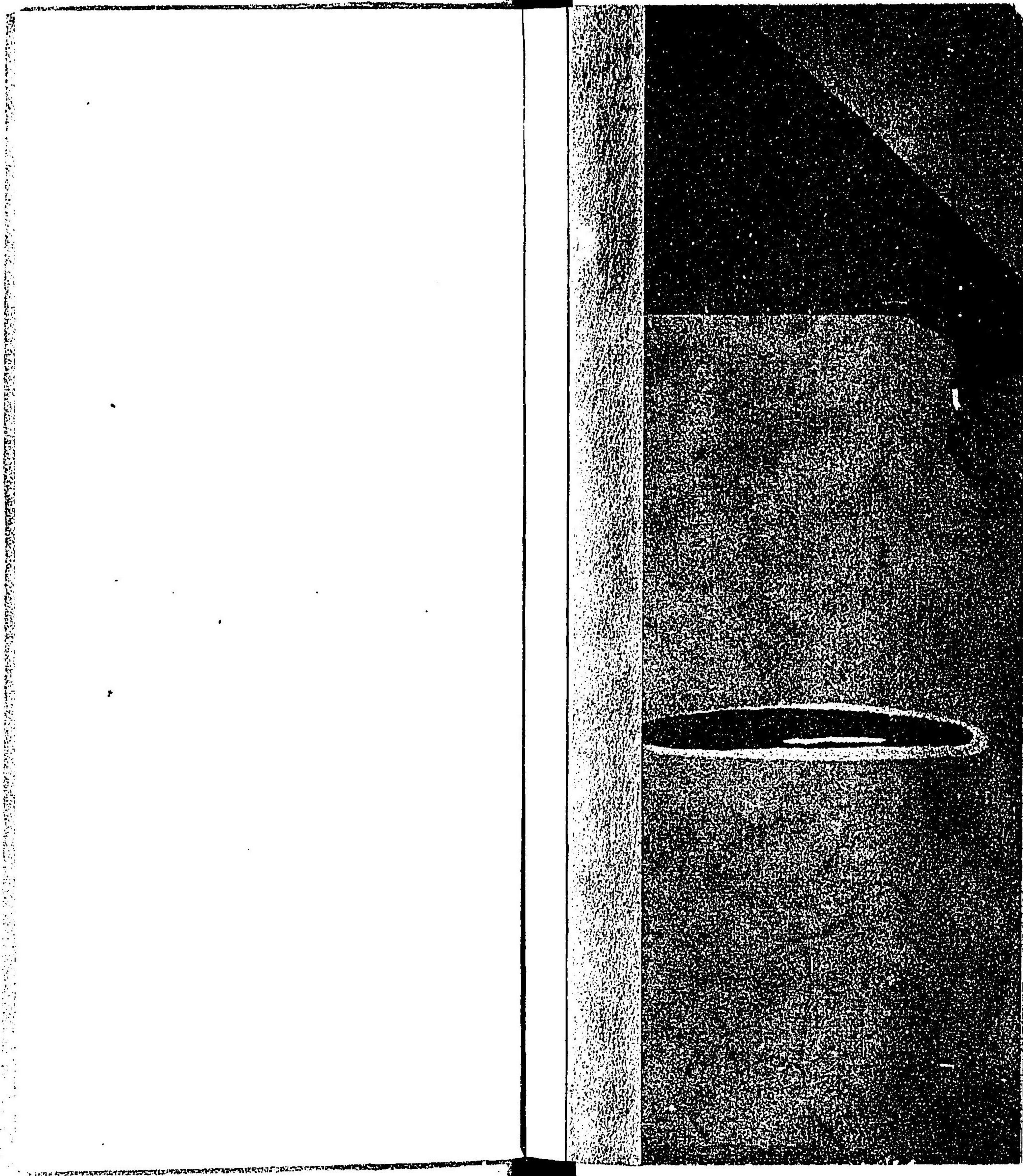
堂



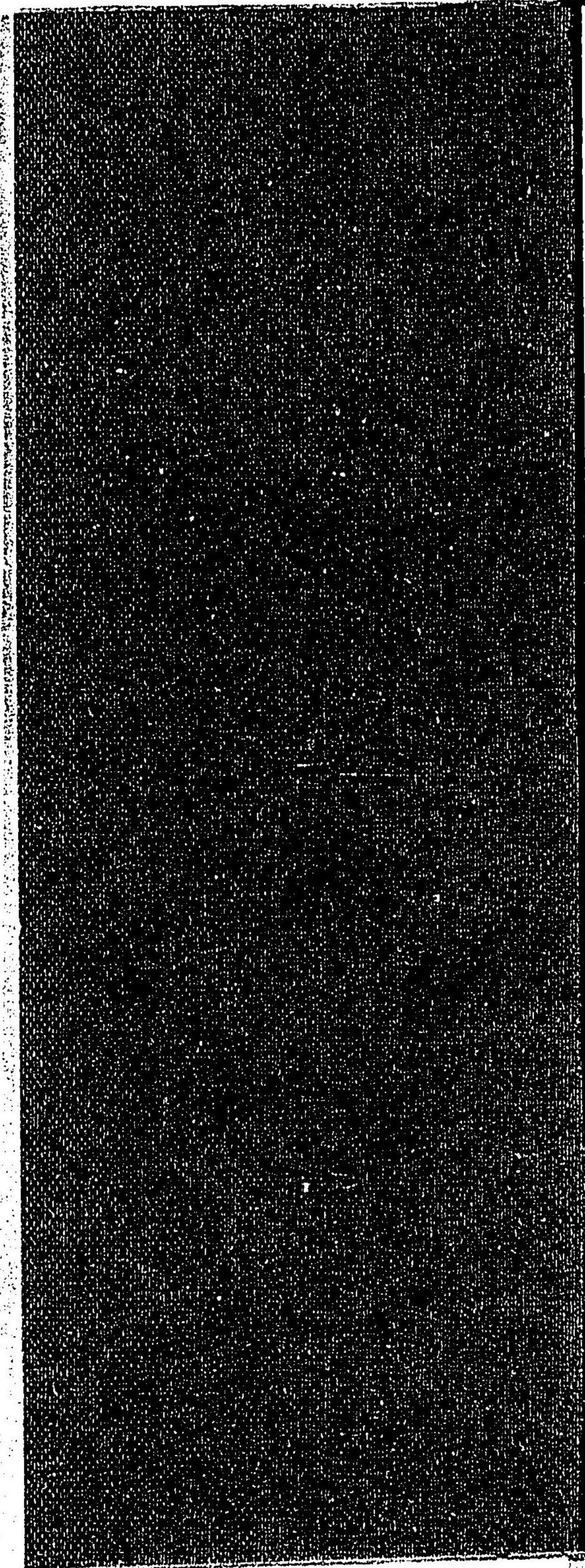
221  
3/11

















特 22

455

おぼろ舟

国立国会図書館

085746-000-0

特22-455

おぼろ舟

長谷川 湊涯 / 著

M35

DBD-0257





特 22

455

おぼろ舟

国立国会図書館